小学校高学年の部

特選　課題図書部門

「戦争がつかせたうそ」

大野町立西小学校　六年

所　彩寧

「シベリアって何？」「戦争ってなんでするのかな？」たまたまそんなことを母と兄に聞きました。最近母は、戦争の映画をいくつも見ているし、兄は、学校の授業で習ったり、ニュースで戦争の暗い話を聞いていたりして、話題が食卓で広がったからです。戦争はダメなこと、悲しい思いをする人がたくさん出てくることは、頭では分かっているけれど、どうして今ロシアやウクライナが戦争していて、なぜ終わらないか分かりません。そんな時私は「ぼくはうそをついた」の本を思い出し、読み直しました。

この本は、私と同じように戦争についてあまり知らない広島に住む五年生のリョウタが主人公。そんなリョウタが尊敬するおじいさんから戦争の様子を聞きます。そして、その戦争でいまだに亡くなった息子を探し続ける、あるおばあさんとの出会いの物語です。

おじいさんからの戦争の話の中で、空から降ってきた焼い弾の話は、私もつらかったです。小さい爆弾でも大きい火事になり、多くの人が亡くなります。そして、死んだ人が河原に並べられ埋められるのです。今では、お葬式をしてみんなで悲しみながらお別れをするのに、家が燃えてしまったり、いつ次の爆弾が降ってくるか分からなかったりするので、気持ちの整理がつけられなかっただろうなと想像しました。

リョウタが行った平和記念公園は、原爆が落とされた場所です。とてもたくさんの人が亡くなり、被ばくして苦しんでいる人が多くいることは私も知っていました。そこには原爆の子の像があり、私たちくらいの年の子が亡くなったり苦しんだりしたそうです。これを考えると、本当になぜ戦争をしなければならなかったのか、もっとわからなくなりました。

リョウタが出会ったおばあさんは、広島に落とされた原爆で大切な息子さんを亡くしました。年を取るにつれておばあさんは記憶があいまいです。夏になると息子さんを探しに町の中を歩き回ります。そしてリョウタくらいの子供たちに、話しかけたり触ったりします。私は初め、認知症だと思っていました。けれどおばあさんの気持ちになってみると、「息子は絶対生きているはず。」「早く会いたい。」という願望がずっとあったと思います。そんなおばあさんにリョウタがついたうそは、息子だと名乗ったことです。私は決してダメなうそではないと思います。人を喜ばせたり安心させたりするうそです。元気な息子を見てホッとしただろうなと私も読みながら笑顔になりました。

この本を読んで、戦争で苦しんだ人がたくさんいるということ、長い期間悩んでいる人がいることを知りました。戦争を経験したひいおばあちゃんも亡くなり、私は戦争の話を聞くことができません。もっといろいろな勉強をしたり調べたりして、なぜ戦争は始まり、なかなか終わらないのか知りたいと思います。

西村　すぐり　作
『ぼくはうそをついた』
ポプラ社

【講評】

戦争について家族と話し合ったことと本の内容を結び付けて、自分の考えをもつことができましね。彩寧さんの中に残っている疑問について考え続けていくことが、戦争のない平和な世の中を作っていくことにつながっていくことでしょう。